

# 信州読書会 YouTubeLive&ツイキャス読書会

## 課題図書 谷崎潤一郎 『二人の稚児』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

YouTubeLive <https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 <https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)

## 谷崎潤一郎 『二人の稚児』



第 304 回の YouTube 読書会の課題図書は、谷崎潤一郎 『二人の稚児』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

[青空文庫 谷崎潤一郎 『二人の稚児』](#)

[朗読しました。](#)

## 煩惱と機根

「煩惱を捨て切れず、情欲に溺れた千手丸」と「煩惱を克服した瑠璃光丸」の二人の様子を通じて、現世における「煩惱」について問われている作品であると思う。

そもそも「煩惱」とは何か。

注解によれば「悟りを妨げる様々な欲望」のことである。もっとわかりやすく言えば、

「人が生きる時に感じる苦しみの原因となるもの」のことをあらわす。

ただ「煩惱」は、高僧が長い年月かけても簡単に断ち切れるものではない。

しかも同じ期間修行しても、心持ちや血筋によって「機根」は個人ごとに異なってくる。

「機根」とは、仏の教えを受ける能力、ひいてはセンスの違いとでもいうべきだろうか。

千手丸と瑠璃光丸の違いは、ここでいう「機根」によるところが大きいようだ。

例えば仏教では「来世の果報は現世の修行によるもの」という考え方が基本である。

その教えに純粹だったのが瑠璃光丸である。

(引用はじめ)

「まろは女人の情けよりも、やはり御仏の恵の方が有り難い」

「まろは、この世で苦勞する代りに、後の世で安樂を受ける積りだ」

(引用おわり)

そんな言葉を発する一方で、仏の教えに無分別であった千手丸に対して、厳しい言葉も残している。

(引用はじめ)

「千手丸が現世の快樂に耽りたいと思うなら、独りで勝手に耽るがよい。それで来世は無間地獄に真っ倒まに落とされて、無量劫の苦しみを忍ぶがよい。その折にこそ自分は西方浄土へ行って、高い所から彼の泣き喚く姿を見おろしてやろう」

(引用おわり)

当初は「煩惱」に対して反発心を抱いていたという千手丸も、結局は情欲に溺れて酒池肉林の中。

谷崎の作品には自分を模したクズ男がよく登場するが、この作品の中で言えば、煩惱の真っ只中にはまっている千手丸こそが谷崎をあらわしているのではないだろうか。

もっとも谷崎が煩惱を断ち切ろうと努力するかは別問題である。

多分、浮世暮らしから離れようとはしないと思うが。

(おわり 合掌)

## 『二人の稚児』 感想

千手丸と瑠璃光丸。

なんと美しい名の響きだろう。

そしてこの名前は、2人の将来を暗示している。

まず千手丸。千手観音とはこの世のご利益(やく)とお慈悲を与える菩薩であるそうだが、その名を貰った千手丸は、のちに山を下りた。

浚われ痛ましい思いはしたものの、仏の慈悲を受けたのか、その後は現世の楽しみを味わい尽くす事になる。

一方、瑠璃光丸。瑠璃は輝く玉。

夢か現か、高貴な老人から輝く水晶の数珠を貰う。

名に恥じめ魂の輝き、水晶や瑠璃にも劣らぬ意志の強さを表しているようだ。

彼は煩惱や女人の誘惑を断ち、のちに高貴な僧侶となり、比叡山に今も残る寺(瑠璃光院)を建てたのだろうか。

瑠璃光丸は煩惱を断ち切ったとして、それはどうしてなのか、私はこのように推察した。

怪我をした鳥は、見かけは鳥だが真の姿は女。

瑠璃光にはそれを視、感じる事ができた。

瑠璃光は鳥(女)を一瞬でも抱いた感触を味わった事により、女人への憧れや煩惱が解消されたのだと思う。

彼女が成仏し、羽を舞わせて昇天した後、瑠璃光はまた寺に戻るだろう。

そして誰よりも気高く、慈悲深く、瑠璃のような輝きを内に秘めた大上人になったのだろう。

全体的に、お伽噺といった感じで、布団の中でうつらうつらと聴きたいような話だった。

(おわり)

## 『二人の稚児』 感想文

大ざっぱな感想は少し難しかったです。

難しいというかよく分からなかったです。子供の頃からお寺に居て世間とは離れた場所においても女性に興味を持つのは本能で普通の事だと思うから、考えないで修業に打ち込むのは難しい事なのではと思いました。

自分から進んで仏の道に進もうと決めたのならまだ大丈夫かもしれないけど、その道に進むしかないと思われる環境なら難しいと思う。

しかも女性が身近にいないから、なおさら興味もわくし、どんどん妄想が膨らんでいくのかなと思いました。

案外身近に居れば憧れもそんなに無いかもしれないし、ダメだと思うとよけいに気になるものだと思うから環境が気の毒だと思いました。

最初に「お前たちは、よくよく仕合せな身の上だと思わなければなりませんぞ。……。」

(青空文庫より引用)

そんな風に言われてもお寺の世界しか知らないのに、押し付けられてる感じが気の毒だし、強要されてる感じが息苦しく思いました。

私はこんな感想しか持てなかったのですが、作者はどんな気持でこの作品を書かれたのか、何を伝えたかったのか分からなかったので読書会で解説していただけたら嬉しいです。

(おわり)

## 『二人の稚児』 谷崎潤一郎 感想文

父母の顔も知らない二人の稚児が、訳あって貴い上人に引き取られ、比叡山で仏道を志す。

浮世を知らず女人の顔さえ見たことのない二人の好奇心は、二歳年上の千手丸の心を乱し、歳を経るごとに、その「煩惱」で少年は苦しめられた。

「煩惱を滅せば、やがて菩提の果を証することが出来る」(新潮文庫 P.223)

悟りの境地へ、という志しの妨げになる「浮世」と「女人」に、それら煩惱の源に近づかせないための経文や「唯識論」などむずかしい種々の教えが、かえって稚児の恐怖を増大させてしまい、好奇心を煽ってしまっているだと、女人の恐ろしさに至っては逆効果であると感じた。

得度の前にその正体を一度でも自分の目で確かめようと、千手丸は命を捨てる覚悟でその恐ろしい地へ向かうのだが、恐ろしければ恐ろしいほどに、瑠璃光丸を近づけたくなく、彼の命を守るべく、正しく清い彼の姿勢がその時には確かにあったのだ。

(引用はじめ)

「浄玻璃(曇りがなくきよらかな水晶、ガラス)のように清いそなたは、わざわざ危険を冒して、修行をするには及ばないのだ。そなたの体に間違いがあったらそれこそ塵は上人に申し訳ないではないか」 (P.236)

(引用おわり)

そして考え尽くした二人の稚児は、「女人は幻」という思いを抱くまでに至る。

思春期の現れの強い千手丸は自ら、「煩惱」に突き動かされていると思いつめ、何とか自分の目で「浮世」と「女人」を見たいというその関心の高まりは絶頂に達してしまった。

今まで想像の域を超えなかった浮世や現実「菩薩のような女人」の姿を見てしまった千手丸は、俗世にどっぷりのめり込んで行き、抜け出せなくなった。まさに仏心を忘れた姿であった。

テレビを見るのを禁止された子供がテレビ中毒になるというひと昔の前の症状と同じだ。

しかし、

千手丸と瑠璃光丸の、「血というものは争われない」、「機根(仏の教えを受ける能力、素質)が違って居た」という上人や人の口の端を信じ、「自分に御仏の冥護が加わって居たのだ」と、その欺瞞で急に千手を見下すように変わって行った瑠璃光丸に何だか虚しさが残ってしまった。

「あの時自分が一緒に行ったら、どんな禍が待って居たのだろうと思うと、彼は己れの幸運を感じずには居られなかった」  
(P.239)

「悟り」とは程遠い独りよがりの冷たささえ感じた言葉、幼さ故なのかそこにはもう千手の存在を突き放す姿が窺えた。

浮世、下界に下りる前、「機根」(仏の教えを受ける能力、素質)は千手にも等しくあったはずだ。二人の「機根」は決してちがっていなかったと思う。

俗へ沈んで行った友のような兄のような存在の人を、誰かの手を借りてでも必死に探し、救いに行くべきではなかったのかと、瑠璃光丸の上人に言われたままに動き理解する未熟さに未練が残った。

醜い自分を見つめ真剣に考え「煩惱」と闘い苦しんだ千手丸と同じ思春期を迎えた瑠璃光丸は、決して悟りの境地には至らず、同じように「煩惱」抱えて行くのだ。

自分だけは特別であると思ひ込むことが幻想であるとしみじみ感じた。

「雛をかばう親鳥の如く」、傷ついた白い鳥を抱きしめ、水晶のお数珠をかけてあげる最後のシーンはとても美しかったのだが、「煩惱」を断ち切ったという瑠璃光丸の理想の「夢」の一場面に過ぎなかったのではないかと感じてしまった。

その後の彼の「煩惱」への闘い、更なる過酷な修行を思い描かずにはいられなかった。

(おわり)

## 「えらい人の矛盾した言葉」

ちょうど、大津から比叡の山行を計画していたので、楽しく読むことが出来た。

最初は、お上人様の言うことはもっともだから、「千手丸、瑠璃光丸、煩惱に惑わされずに頑張っ！」という気持ちだった。

(引用はじめ)

「人間が親を恋慕うたり、故郷に憧れたりするのは、みな浅ましい煩惱の所業であるのに」

(引用おわり)

しかし読んでいるうちに矛盾を感じ始めた。総ての禍いの源とされている女人と云う生き物から生まれたという矛盾。血縁への思いが煩惱の所業であるのに、血や機根で比較されるという事。見せしめ。

もう一つ矛盾を感じたのは、普賢菩薩の使者の言葉。前世で浮世に居たのに、情欲に溺れず、女人の色香を斥けた事は本当なのだろうか。そしてそれは善因なのだろうか。迷わせた罪の報いは禽獣の生なのだろうか。女人の幻に苦しめられて居るなら、その女に会え、という矛盾。

親や異性や物欲など、「何かを頼みに生きる事」が煩惱なのであれば、解脱する事は、人間として死ぬ事としか考えられない。もしその頼みが適切ならば、人はよく生きる事ができるという事だろうか。

(おわり)

## まろの本願でおじゃる

本書『二人の稚児』読後の乃公、愚にもつかぬ雑感以下に編み出したり。

### ▼あらすじ:

出家を控えた千手丸と瑠璃光丸が「女」という名の煩惱にとっても苦労したよっていう話。

### ▼読書感想文:

っていうか文章がバチクソに上手すぎて、かえって何の参考にもならない。[感想文・完]

### ▼余談 ～ ラストシーンの解釈について ～:

作中ラストでは瑠璃光丸が前世は女であったという鳥を抱きしめる。この行為を瑠璃光丸の「煩惱」と捉えるか。それとも、煩惱を超越した「慈愛」と捉えるか。または別の示唆があるのか。

その説明にあたり、まず瑠璃光丸の夢に現れた老人の言い分を要約すると、<<お前が女人の幻に苦しめられて居るなら、その女に会ってやるがよい。>> とあり、女に会ってしまうと千手丸の様に煩惱に墮ちるのではと思いきや、そうではなく、<<其の女はお前より先に阿弥陀佛の国へ行って、お前の菩提心を蔭ながら助けてくれるだろう。>> という理由だからだそう。これにより、<<お前の妄想(※私注:煩惱を指す)は必ず名残なく晴れる>> のだそうで、だから女に会いに行けというのである。そしてそれ以降、邪念が湧かないよう、<<お前の信仰が行くすえ長く揺がないように、此の水晶の数珠を与える>> と老人は語り、瑠璃光丸が目を覚ますと、なんと、<<彼の膝の上には、正しく水晶の数珠>> が実際にあったのだという。そしてこの日は満願の夜でもあった。

このように老人のくだりを整理すると、満願成就のお膳立てはバッチリ完璧である。

こうして最終場面において瑠璃光丸は <<雛をかばう親鳥の如く、両腕に彼女をしっかりと抱き締めた。>> そして、<<弥陀の称号を高く／＼唱えて、手に持って居た水晶の数珠を彼女の項(うなじ)にかけてやった。> とあり、この「雛をかばう親鳥」という点からして、彼の内には女性という現世の快樂といった下心や好奇心が目的としてあるのではなく、盡十方(じんじっぽう)の佛陀の光明に浴することがやはり目的であったものと思われる。よって、この場面は崇高な慈愛の精神に基づく行為であると思ふ。

といったことを考えながら、こんな感じで素直に読むと本書は清々しさを覚える作品である。しかし、谷崎潤一郎の作品は『春琴抄』『痴人の愛』『少年』『刺青』等、女性崇拜をモチーフとしたものが多いので、穿(うが)った見方をすると、本書は「作中全編を通して女性の姿を見たことがない瑠璃光丸が頂上で会った鳥を女性に見立てて偶像崇拜に及んだ話」と拡大解釈することもできなくはない。

以上

(おわり)



## 森鷗外の『山椒大夫』みたいだった

谷崎の初期作品は、都市生活者の匿名性と、その匿名性を担保に繰り広げられる性的倒錯の快楽を追求していた。しかし、本作では、もはや題材が枯渇したのか、中世を時代背景にした、仏教的な世界観を展開していた。

私は、学生時代に、芥川龍之介の古典を題材にした作品(『羅生門』『地獄変』など)が好きで、その流れから、谷崎の『少将滋幹の母』を読んだ。内容は忘れてしまったが、それは、古典的かつ術学的なレトリックを撒き散らしながら、母への思慕を情緒豊かに描いたような作品だったと思う。

今回、『二人の稚児』を課題図書にして読んでみたわけであるが、そもそも、私は、何故日本にはお稚児文化があるのか、非常に興味があって、選んだのである。しかし、この作品には、その手がかりになるような話はなかったので、次回の課題図書、森鷗外の『中々・セクスアリス』に持ち越すことにしよう。

仏門におけるプラトニックラブでも描いているのかと思ったが、そうでもない。

浮世に埋没して、快楽を貪っている千手丸のことを羨ましく思う瑠璃光丸が、羅生門の下人よろしく、寺を捨てるのかと思いきや、一途に修行し続けることを決意するに及んで、あれ、とおもってしまった。

てっきり、おのれのどうしようもない本性に開き直り、墮落して終わるかと思っていたので、がっかりであった。

ドストエフスキーは『カラマーゾフの兄弟』において、ゾシマ長老の遺体が腐臭を放ったことで、動揺したアリョーシャの信仰への懐疑を描いていた。世間の人は、信心深い人間が墮落するのを喜ぶという悲しい現実を赤裸々に暴いていた。

だが、谷崎は、瑠璃光丸をアリョーシャとして描きたかったわけでもないし、仏の道への懐疑を描きたかったわけでもない。信仰をテーマにしているのではなく、仏教を単に題材として、選んでいることがバレバレである。

とはいうものの、文章は流れるようで、レトリックも教科書的な技術力があり、手堅い作品だったが、それだけの作品だった。

森鷗外の『山椒大夫』に似てるような気がする。あれも、古典を題材にとりながら、とくに教訓めいたものななかった。

(おわり)